鉄筋の音舎

森村誠一

講談社

鉄筋の畜舎　定価　九八〇円
昭和四十八年三月二十日　第一刷発行
昭和五十三年一月十三日　第八刷発行
著　者　森村誠一
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二丁目一二番二一
郵便番号　一一二
電話　東京(945)一一一一(大代表)
振替　東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 森村誠一　昭和四十八年

Printed in Japan
0093-301464-2253 (2)　(文2)

鉄筋の畜舎

装幀　安彦勝博

過失の疑惑

1

その事故は、一瞬の間に起きた――。

夏の日曜日の朝の閑静な住宅街の中を走る車道を、二台のスポーツタイプの外車がかなりのスピードで走って来た。

朝の早い時間で、付近に人影はない。牛乳配達や新聞少年の姿も見えなかった。動いているものの気配は、その二台の車だけである。このあたりは、サラリーマンの小住宅の多い地域で、住人は、一週間に一度の朝寝坊を楽しんでいるのだろう。

車は、遮るもののないのをよいことに、たがいにスピードを競い合っていた。ふだんならば、このあたりの道路では考えられないことである。

車間距離もあけずに、アクセルを踏みこんでいる。いま急に人に飛び出されたら、避けられないようなスピードを、わあわあきゃあきゃあいいながら、玩んでいるのだ。

「ホラ、もっとだして！　抜かれるわよ」

「何をモタモタしてんのよう」

ハンドルを握っている運転者に、同乗した女が、しきりに危険な声援を投げる。性能のいい外車だから、軽く踏みこんだだけで、スピードメーターの針はグッと上がる。

朝の住宅街の中央を貫く二車線の道路は、直線につづいて、何の障害物もない。

学校が近くにあるらしい。黄色い警戒標識が見えた。舗装の上にも「子供、とびだす」とか、「徐行」などと白いペンキで書かれているが、スピードに酔った運転者には、そんな文字は目に入らない。

もっとも入ったところで何の効果もなかったであろう。また注意すべき学童や子供は、まだ寝床の中にいるはずだ。

直線が尽きて、道はカーブにかかった。横断歩道の白線が見えたが、車はほとんどスピードをゆるめずに突っこんでいった。

――事件はその一瞬に起きたのである。

前を走る車の運転者は、突然道の中央にチョコチョコと走り出た幼児の姿を見た。

「危ない！」

危険を意識したときは、〝障害物〟はあまりにも接近し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

すぎていた。早朝の空いた道路をハイウェーのように錯覚した運転者は、突然飛びだした障害に対する反応が鈍っていた。

反応どころか、道路とは、自分の車のためにあるのだとおもいおごっていた運転者には、住宅街の中央という警戒心など、最初からまったくなかったようである。

ハッとした一瞬に、意志はあったが、まったく動作に表われない。動作の遅れに、ブレーキ・ペダルを踏んでからブレーキ・シューがドラムを押えるまでの機械的遅れが加わった。ブレーキ力がようやくききはじめたときには、すでに哀れな被害者は、ボンネットの上にすくいあげられ、かたい舗装の上に叩きつけられたあとであった。

追い越しにかかっていた後続の車は、危ういところで追突をまぬかれた。

「いやーっ」

と若い女の悲鳴がおきた。車に乗っていた女たちではない。被害者が飛びだしたあたりから、若い娘が潰されたトマトのようになった被害者のそばへ駆け寄ったのである。

子供をはねた車は、いったん道路の脇へ停まるかに見えたが、さらに来たとき以上の加速をして逃走をはじめた。後続の車が、自分だけとり残されまいとするように、あわてふためいて、あとを追った。二台の車はたちまち朝モヤの中に消えた。

被害者の姉らしい娘は、ボロ屑のようにされた子供に取りすがって、動転した泣き声をあげているだけである。とても轢き逃げを図った車の登録番号をひかえる余裕などない。

「シゲちゃん、シゲちゃん、どうしよう、ああどうしよう」

娘は完全に動転していた。子供の血に染まって、自分自身が轢かれたようになりながら、ただ泣いているだけである。近所の人間に急を知らせる智恵もでないらしい。

ただならぬ気配を悟って、ようやく近所の人間が出て来た。

「何だね？　朝っぱらから騒々しい」

最初はブツブツ言っていた付近の住人も、現場を見るなり、顔色を変えた。

「大変だ！」

「まだ少し生きているぞ」

「警察を呼べ」

「救急車が先だ」

間もなく朝の静かな住宅街は、警察関係の人と車があふれかえり、ものものしい気配につつまれた。それを取り巻く弥次馬が騒ぎをさらに攪拌していく。

幼い被害者は、救急車で病院へ運ばれる途中で死んだ。

「何があったんだ？」

『直川さんとこの坊やが轢かれたんですって」
「轢き逃げですって」
「ひどいことをする」
現場検証をすすめる警察官を遠巻きにしながら、付近の住人がひそひそとつぶやく。
「こんなに朝早くから轢き逃げ？」
「公園に仕掛けた巣箱を、お手伝いさんと見に来たんだそうです」
「だれも見ている者がいないとおもって逃げたらしい」
「もう子供たちは、朝でさえ、安心して出せないわ」
同じ年ごろの子供をもつ親たちは、いま目にしたばかりのあまりにもむごたらしい被害者の体に、他人事ではないような恐怖を感じた。
被害者は近所に住む直川雅之というある業界新聞の社長の息子である。ことし四歳になる幼稚園児だった。
数日前、公園に仕掛けておいた巣箱を、お手伝いの娘といっしょに覗きに行く途中、横断歩道での事故である。
娘は動転していて、加害車のことは何も覚えていなかった。目撃者もあらわれない。
警察は悪質な轢き逃げとして、捜査をはじめた。

2

この事件から三ヵ月ほどの後の十一月半ばの風の強い日、東京地裁刑事部第×号法廷において一つの判決が下った。件名は殺人と道交法違反の併合である。被告人に懲役三年六ヵ月の実刑が言い渡された。
事件は、被告人が住宅街の中の道を無謀運転して、横断歩道で死亡事故をおこしたうえに逃走したものである。
被告人竹場正吉は、東京新宿のデパート『赤看板』社長保科商平のおかかえ運転手である。
ゴルフに行く社長を迎えに行く途中での事故だった。
昨年十月、竹場は個人タクシーの申請をして、本年七月、認可前の実質的審査である〝聴聞〟を終え開業を待つばかりになっていた。認可待ちの間に交通事故や違反をすると認可が取り消される。
このため検事は、
「被害者に重傷を負わせて、そのまま放置すれば、死ぬかもしれないことを知りながら、個人タクシーの認可を取り消されることを恐れて置去りにし、もって被害者を死に至らしめたことは、職業運転者として悪質であり、重大な義務違反であって、未必の故意による殺人罪が成立する」
として、道交法違反に併せて、殺人罪を求刑した。
裁判所は、求刑趣旨をそのまま認めて、懲役三年六ヵ月の実刑を言い渡したのである。

被告人の、「おれが轢いたんだから、さっさと有罪にしてくれ」と言わんばかりの改悛の情のまったく認められない自棄的態度が、裁判官の心証をいちじるしく悪くしたせいもある。

被告は控訴しなかった。控訴期間は経過して、判決は確定した。

竹場正吉はS市の刑務所へ送られた。彼が狭心症の発作によって急死したのは、入所してから一ヵ月のちのことである。S市はM県の寒冷の地にある。すき間風が凶器のように身体を突き刺す。夜間の冷えこみは、酷烈であった。

慢性の心臓の持病が、環境の激変と、寒気によって、急激に悪化していたらしい。発作がおきたのは、ちょうど夜中の十二時ごろであった。数十秒で頂点に達した疼痛は、心臓部を巨大な触手でねじ絞るように激烈だった。

竹場は声もださずに床を転がりまわった。声をだしたくも、あまりに激しい痛みに、でなかったのである。顔面は死人のように蒼白となって、呼吸が困難になった。同房の服役者の連絡によって、看守が医務室にかつぎこんだが、病状は悪化する一方であった。

おもわず目をそむけるような苦悶をつづけながら、竹場正吉は、しきりに、

「おれじゃない、おれがやったんじゃない」

と叫びつづけた。服役したあとも無実を訴える者はあるが、竹場は、犯行を素直に自供している。医者や看守は、竹場が苦痛のあまり、譫言を言っているのだとおもった。それに彼がいまさら無実を訴えたところで、どうにもならないことである。

明け方の白々とした光が、医務室の窓をうす明るく染めたころ、竹場は死んだ。最後に呼んだ名前は、妻と子供のもののようである。

竹場の死は直ちに遺族に連絡された。駆けつけた妻子に、医師は、「できるだけの手をつくしたが、どうにもならなかった」と言うしかなかった。

刑務所などに来ないで、〝娑婆〟のちゃんとした環境で節制の生活を送っていれば、まだ死ななくもすんだ体だとおもったが、それは刑務所づきの医師の言うべき言葉ではなかった。

「父は、死ぬときに何か言い残しませんでしたか？」

竹場の妻と来た十七八歳ぐらいの若者が聞いた。竹場とあまり似ていないが、「父」と呼んだところを見ると、息子なのであろう。彼は死んだ竹場正吉の息子で『栄一』と名乗った。

一直線の眉と大きな目をもち、口もとのひきしまったいかにも意志の強そうな若者である。父を失った悲しみに精

いっぱい耐えながら、うちひしがれている母親を一生懸命に支えている彼に、医師は好感をもった。
「さあべつに……」
医師の脳裡に、竹場が苦悶をつづける中でしきりに叫んだ言葉が、ふとよみがえったが、あえてそれを口中に留めた。
「自分は轢き逃げなんかしていないというようなことは言ってなかったでしょうか？」
だが彼は一直線に追及してきた。
「そう言えば……」
医師はふと釣られて言ってしまった。
「言ったんですね？」
栄一の口調に熱が入った。
「そんなことを聞いてどうするんだね？」
「父は轢き逃げをするような人間じゃないんです」
「しかし本人が自供したんだろう」
「そのへんがぼくにはどうしても納得できないんです。父は十八年間の無事故歴を誇っていました。近く社長からひまをもらって、個人タクシーを開業するばかりになっていたんです。その父が住宅街の真ん中でそんな無謀運転をやるはずがない。親父は心の優しい人間だったんです。親父はいつも言ってました。自動車の運転ぐらい人間の性格があらわれるものはないんだと。運転技術よりも、他人をいたわる心が大切だ。人をいたわろうとする心さえあれば、事故などおこるはずがない。だから運転免許の試験は、実技や専門知識のテストの前に、昔の修身のような道徳教育をすべきだと、いつも主張していたんです。親父は、猫一匹も轢けない人間でした。おれは自動車の運転手で終るけど、おまえは一生懸命に勉強して、もっと大きなスケールで社会の役に立つ人間になってくれと、口ぐせのように言っていた父、私の大学の入学金をためるために、唯一の楽しみの晩酌さえ節約していた父、その父が、轢き逃げなどするはずはない！」
栄一は話している間に感情がこみ上げてきたらしい。声が震えて、目がうるんできた。彼の悲しみはわかっても、それを医師に訴えるのは、お門ちがいだった。だいいち医師は、竹場がどんな理由で服役していたのかも知らない。
「きみの悲しい気持はわかるがね、いまさらそんな疑問をもったところでしかたがないだろう。それよりもきみが一日も早く立派な社会人になって世の中のためにつくすのが、お父さんの犯したあやまちを償うことになるんだ。そしてそれをお父さんは、いちばん望んでいるだろう」
医師は月並みだが、そう言うしかなかった。
「先生、おねがいです！　父は本当に言ったんですか？

それを聞かないことには、どうしても気持が吹っ切れないんです。おねがいです、おしえてください。父は、自分がやったんじゃないというようなことを言わなかったでしょうか？」

栄一は切々と訴えた。彼が何をおもってそんなことを聞いているのか、医師にはわからなかったが、その真剣な口調に医師は動かされた。

周囲に看守がいなかったことと、栄一に向けた好感が、医師の口をほぐした。それに彼はそれほど重大なことだとはおもわなかったのである。

「そう言えば、そんなことを言ったような気がするね」

たしかに言ったのを聞いているが、語尾を少しにごらせたのは、やはり刑務所づきという特殊な職場からくる、何から何まで規則ずくめの非融通性が、身に沁みついてしまったせいかもしれない。

「えっ、本当に言いましたか」

「そんなことを言っていたようだね」

「やっぱり……」

唇をかみしめて宙をにらんだ栄一が、さらに詳しくたずねようとしたとき、係官が入って来た。

3

「母さん、やっぱりぼくのおもったとおりだったよ」

現地で荼毘に付した父の遺骨を抱いて、帰京する列車の中で、栄一は母に言った。

「栄一、いまさらそんなことがわかっても、どうにもならないことじゃないか」

母の静枝は、すっかり疲れきっているようである。まだ四十そこそこの年齢で、目もとが栄一とよく似ており、鼻すじが通った、口もとの優しい、いかにも上品な面立ちである。まだ十分にみずみずしい美しさをとどめている。

夫の急死によるショックとそれにつづいた未知の土地への旅行、荼毘の前後の様々な手つづきなどで、彼女は、心身ともに疲れ果てていた。面倒な手つづきのすべては、栄一がやってくれたが、ショックと悲嘆まで栄一が代って背負ってやることはできなかった。彼には息子としての十分すぎる悲しみがあったのである。

「どうにもならないことじゃないよ、母さん！」

栄一は周囲の乗客がびっくりするような声をだした。しかし彼はそんなことは意に介していないようだった。その後の声を低めたのも、彼らに自分の話を聞かれるのがいやだったからにすぎない。

「父さんは、自分でやってもいないことをやったと言ったんだ。あの医者は嘘を言ってない。嘘を言う必要もないん

だ。医者が証言したことは、ぼくがずーっと疑っていたこととピッタリ一致した。父さんはやってない。しかしやってもいないことをどうしてやったなんて言ったんだろう？ただのあやまちじゃない、悪質な轢き逃げだよ。父さんが最もやりそうもないことだ。個人タクシーの開業を前にして、ただでさえ慎重な父さんが、最も慎重にしていた。それに父さんは心臓が悪い。これから冬に向かう刑務所へ入るのは、自殺するようなものだ。それを承知で、自分から行った。考えられる場合が二つある。脅迫されたか、あるいは、義理か何かにしばられてどうしてもそう言わざるを得ない羽目に追いこまれたかのどちらかだ」

「栄一、もうそんなことを考えるのは、よしなさい」

「よさないよ、父さんがぼくの耳もとで、おれがやったんじゃないと訴えつづける言葉が聞こえるんだ。その言葉が聞こえているかぎりはよさない。ぼくは、未決勾留中の父さんに会いに行ったときのことをよく覚えているんだよ。ぼくが、父さんがあんな事件をおこしたなんてとても信じられない。何かのまちがいだろうと言うと、父さんは悲しそうな目をして、ぼくの顔をじっとみつめ、『栄一、父さんを信じろ。実刑を食っても、まじめにつとめればすぐに出られる。母さんを大切にして待っていてくれ』と言ったんだ」

この犯人は他にいる。そいつはどこかで笑っている。そしてそいつが、父を殺したのだと、栄一は確信していた。

栄一は母に話しながら、拘置所の接見室で父に会ったときの模様をおもいだした。

立会人の監視つきでは、おもうことも話せなかったが、栄一が、

「ぼくにはどうしても、父さんがやったとはおもえない。事件のときに居合わせたという被害者の家のお手伝いにあって、事実をよく調べてみたい」

と言うと、正吉はなぜか怒った顔をして、

「そんなことは絶対してはいけない。おまえがいますることは、大学の入試に備えることだ。事件のことはいっさい考えるな」

と強い口調で言った。

栄一はT大の医学部を志していた。T大医学部は試験も難しいが、入学金や授業料の高いのでも有名である。正規の入学金だけでも数百万円、裏口入学になると、どのくらいかかるのか、見当もつかない。

とても運転手風情の手に入る金額ではない。しかし正吉は、入学金のほうは、社長に頼んで退職金を前借りでも何でもして揃えるから、おまえは心配せずに勉強しろと言ってくれたのだ。

個人タクシーの申請をしたのも、栄一の学費を賄うため

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

である。一定の月給に縛られるおかかえ運転手よりも、個人営業のほうが、本人の働き次第で収入を増やすことができる。

父はすべて栄一を中心に考えてくれたのである。その父があろうことか、悪質な轢き逃げをして、殺人罪として実刑を言い渡された。

しかも父は、まことに素直に自供をして、判決に対して控訴もしない。栄一は納得できなかった。しかし正吉は栄一に「父を信じろ」と言った。父を信じるということは、彼の犯行を信じないことである。

だが、正吉は、栄一が事件のことで動くことをかたく禁じた。父の行動を信じて、受験勉強に専念しろと強く命じた。

「父さん、ぼくは大学へ行くのをやめるよ」

「なぜだ!?」

その言葉は正吉にひどい打撃を与えたらしい。彼の体は実際に何かの強い力の作用を受けたかのようにグラッと揺れて見えた。

「だって父さんが一人で苦しんでいるのに、ぼくだけのんびり勉強なんかしていられないよ。それに入学金も、学資もない」

「そのことなら心配することはない。社長が出してくれることになったんだ。社長には出す義務がある」

「出す義務?」

「いや貸してくれると言うんだ」正吉はややあわてた口調で言い訂(なお)して、「おまえが一人前の医者になるまで、必要な学費はそっくり貸してくれると言った。だからおまえは勉強だけに専念してくれ」

正吉が言ったとき、規定の面会時間が切れた。それが彼に会った最後である。その後に判決が下って、S刑務所へ収容されたのである。

4

列車が一つの駅へ入った。かなり大きな駅である。隣りのマスに眠っていた二人連れの乗客が、

「弁当買うか」

「そうだな」

「ここで買っておかないと、もう朝まで買えないかもしれない」

「それじゃあ買っとこう。あれ、細かいのがないなあ」

「きみの分も出しておく」

「うん、貸しといてくれ」

「いいよ、大した金額じゃないから」

そんなことをささやき合っているのが聞こえた。栄一の

頭に、事件の重大な鍵が閃いたのは、そのときである。
いま一人の乗客は「出す」と言い、もう一人の乗客は「貸してくれ」と言った。出すほうは、奢るつもりで、借りる側は、あくまでも、あとで返すつもりだった。
栄一は、同じ様な会話が、父との最後の面会のときに交わされたことをおもいだした。
最初父は「社長が出してくれる」と言い、聞き重ねた栄一に、少し慌てたような口調で「貸してくれる」と言い訂した。
しかしそれは医大の学費である。入学金と合わせて通算すれば、何千万という金額になるはずだ。たかだか二、三百円の駅弁とはわけがちがう。
〈あれは単純な父の言いまちがいだったのだろうか？……それとも〉
もし父の言いまちがいでなかったとしたら、どういうことになるか？
〈社長が父の最初の言葉どおり、自分の学資のすべてを出すと言ったとしたら……？〉
栄一はハッとなった。べつの新しい視野が見えかかっていた。
〈社長はどうしてそんな大金を出す気になったのだろう？父は社長から前借りすると言っていたが、その可能性については、かなり悲観的だった。それが父を悩ませてもいた。退職金で入学金を賄えないことはわかっていた。社長はケチだから、退職金までも出し渋ると、よく父は言っていた。そのケチの社長が、どうしてそんな大金を出す気になったのか？〉
〈もしかしたら、父は社長と取引をしたのではないか？〉
〈事故をおこしたとき、父以外のだれかがハンドルを握っていた。その人間が犯人であるとわかっては、社長にとって何か都合の悪いことがある。そこで彼は父に取引をもちかけた。『きみが身代り犯人になってくれれば、息子さんの学資のすべては、面倒みよう』と。入学金の捻出に苦しんでいた父は、その申入れを受けた〉
〈すると、父は、果たしてだれの身代りに立ったのか？〉
〈社長本人か？　いや社長は自動車の運転ができなかったと聞いている。社長以外の人間で、その男、あるいは女が、犯人になっては、社長にとって都合の悪い人間とはだれか？　最も単純に考えられるのは、社長の肉親である。社長にはたしか十人ほどの息子や娘がいる。いずれも父親の財力を背景にして遊びにうつつを抜かしている〝極道〟だという〉

「もしかしたら？」
栄一は、おもわず声をだした。
「おまえ」母が心配そうに彼の方を見て、「あまりおもいつめないほうがいいよ」と言った。
列車はすでに県境を越えたらしい。夜目ながら車窓を白白と染めていた雪の風景が、凍りついたような黒い構図に変っていた。

5

S市から帰って来た栄一は、しきりに止める母を振り切って、保科商平に会いに行った。門前ばらいは覚悟のうえである。その場合は何度でも通うつもりでいる。
新宿西口に赤看板の本店はある。以前は何気なく見過していた新宿名物の荘重なベアリングウォールの八階建の本館と、それに接続して拡張された新館の近代的なカーテンウォールの線の感じを強くだした美しいパターンや、朝、昼、夕方によって色調が変化する自然発色の外壁が、歳末大売出しの飾りをつけて傲然と彼を見下しているように見えた。
「虫め！　近寄れるものなら、近寄ってみろ」と言わんばかりに、潤沢な昼光を受けてにぶい金色を発している。
いま角筈方面にあたって新たに用地を獲得して、別館増築工事が進行している。
「親父を殺して、平然と肥え太っているのだ」
竹場は憎しみをこめて、建物を見上げた。
通用口の守衛所に、社長に面会したい旨を告げると、相手はびっくりしたような目を栄一へ向けた。
詰め襟の高校生が、いきなり社長に会いたいと言ったので聞きちがいかとおもったようである。
「社長というと保科社長のことかね？」
「そうです。他に社長がいますか？」
栄一の最初から好戦的な姿勢は、守衛の印象を悪くしたらしい。
「約束でも取ってあるのかね？」
「そんなものはありません。しかしぼくの名前を取り次いでくだされば会ってくれるとおもいます」
ホウというような顔を守衛はした。みすぼらしい詰め襟の栄一は、どう見ても、赤看板の社長がフリーパスで会うVIPには見えない。
「どんな用件かね？」
守衛は面倒くさそうに言った。
「竹場と言ってください。竹場正吉の息子がぜひ社長に会いたいと」
「タケバ？」

「社長の運転手だった竹場正吉です」
「ああ、あの竹場さん」
ぶっきらぼうだった守衛が、初めて反応を示した。
「きみが竹場さんのご子息さんか。お父さんは、この度とんだことだったね」
よそよそしかった守衛の態度が、急に同情的になった。しかし彼の同情が、父の死を知ってか、あるいは単に、轢き逃げ犯人として服役したことに寄せられたのかはわからない。
おそらく彼はまだ父の死を知らないはずである。
「ちょっと待ってなさい。とにかく問い合わせてみるから」
守衛は内線電話を取り上げた。しばらく秘書か何かと話してから、彼は面を栄一の方へ向けて、
「秘書部長が最初に会うそうだよ。案内してあげよう」
「ぼくは保科社長に会いに来たんです」
「ま、とにかく部長に会いなさい。私ではどうにもならないのだ」
守衛は気の毒そうに言って、先へ立った。従業員用エレベーターに乗って導かれたところは、五階である。売場の喧噪からまったく隔絶された一角で、まるでホテルの内部のようであった。守衛もふだんはあまり立ち入らない区画らしく、身をすくめるようにして歩いている。
廊下のほぼ中央の「第三特別応接室」と名札のかかっている部屋へ案内された。
「ここで待っていてください。すぐに部長が見えますから」
守衛は言うと、蒼皇として部屋から出て行った。室内には毛足の長いうすいブルーの絨毯が敷きつめられている。ソファのクッションも申し分ない。しかし何となく寒々とした雰囲気であった。
それは絨毯の色が、心を緊張させると同時に、白いまま残された周囲の壁が圧迫感をもっているせいかもしれない。
それがこのデパートの幹部だけが使用するにちがいない部屋の排他性を強調しているのである。
「負けるものか」と栄一は壁をにらみかえした。
彼は敵地に乗り込んだような緊張を覚えていた。彼にとって、そこはまさに敵地そのものであった。
待つ間もなく、廊下に足音があり、度の強そうな眼鏡をかけた四十年輩の男が入って来た。体つきのわりに、顔の大きな男である。皮膚のすみずみにまで栄養の行き届いたようなテラテラした顔に精いっぱいの愛想笑いを浮かべている。
いかにも他人の顔色を見ることだけに、半生を費してき

たような、訓練された笑顔だった。
「ああ、大変お待たせしましたな。竹場君のご子息だそうで。いやこんなご立派なご子息がいらしったのか」
彼は部屋に入るなり、にこやかに声をかけた。しかし栄一は、彼のレンズの奥の目が、少しも笑っていないことを敏感に見て取った。
「竹場君には、この度大変なことでしたな。社のほうからもおくやみに行こうとおもっていたのですよ。先を越されてしまって恐縮しています。私が秘書部長をしている咲山です」
彼らはすでに竹場正吉が死んだことを知っている。
咲山がテーブルの上に置いた名刺に目もくれずに、栄一は、
「社長にお目にかかりたいのですが」
一直線にたたみかけた。
「まあまあ、いま何か飲物でももってこさせるから、きみ、コーヒーと紅茶どちらがいい？」
咲山は年齢と地位の優越の上に立って、ゆったりと手をあげた。
「社長はいるんですか？」
「まあそんなに急ぐものじゃないよ」
咲山のレンズ越しの目が、栄一の強い視線に出あって、たじろいだように外れた。保科商平はいるとおもった。まず咲山を出して、栄一の意図をさぐろうとしている。
門前ばらいをくわさず、さりとて、直接応接しない保科に、栄一はうしろ暗い何かを感じた。
若い女の秘書が、紅茶とケーキを二人分運んで来た。栄一が好みを言わないので、咲山が勝手に命じたのである。
咲山が待ちかねたように、カップに手をのばした。紅茶が欲しかったのではない。手持ぶさたをごまかすためである。
「社長に会わせてください」
栄一は、紅茶に見向きもせずに言った。
「用件は何かね？」
咲山は観念したように聞いた。栄一の訪意を聞きだして、できれば、咲山のところで追い返すように、保科から言い含められて来たのにちがいない。
「社長に会ったうえで申し上げます」
「それじゃあ困るんだよ。社長は非常にお忙しい。いきなり来て、ただ会いたいだけじゃあ取り次げない」
「父が死ぬ直前に、服役地に会いに行って、社長への伝言をことづかったのです」
咲山の顔色が明らかに変るのがわかった。
「ちょっと待っていて」

飲みかけのカップを音高くテーブルの上に置くと、彼はそそくさと部屋から出て行った。自分の判断にあまって、保科へはかりに行ったのである。

待つ間もなく、咲山は、保科といっしょに戻って来た。栄一は保科と直接顔を合わせるのは初めてである。しかしその顔は、父が仕えた社長として、よく知っていた。

栄養質の厚味のある顔の中央に鼻翼の張った鼻が目立つ。唇も厚く大きい。ところが、眉毛が粗で、目が細いので、アンバランスな印象をあたえる。

「きみはもういい」

部屋へ入るなり、保科は咲山へうるさい蝿でも追いはらうように手を振った。

最敬礼をして咲山が部屋から出て行ったのをたしかめたあとで、保科は栄一の正面のソファに腰を下した。

栄一は喉がカラカラになっているのに気がついた。父を死へ追いやった容疑最も濃厚な人間と、真正面からまみえたのである。それだけでも相当な緊張であるところへ、人間の貫禄のちがいが栄一を圧倒した。

相手は何といっても、日本実業界の一方の旗頭であった。生き馬の目を抜く実業界の優勝劣敗をくぐり抜けて、巨大企業を築き上げた創設者である。

正面に対い合うと、肉づきよい横幅の広い保科の鼻の穴までがよく見えて、栄一の笑止な見参をせせら笑っているようであった。

しかし保科には、実はそのときあまり余裕がなかった。竹場正吉が、息子にどんな〝遺言〟をしたのか、気にかかっていたからである。

栄一が〝遺言〟のことをほのめかすと、咲山の背後からすぐに現われた保科の余裕のなさは、貫禄のちがいに圧倒されながらも、栄一の疑惑を十分にそそっていたのであった。

咲山を追いはらったことも、保科の弱味を示すようだ。

「きみが、竹場君の息子か」

栄一の前に重々しく坐った保科は、よけいな言葉はいっさい省いて、

「私が保科だが、何かお父さんからこの私へことづけがあるそうだね」

とうながした。

栄一はそのときおもいきって、父の臨終を看取った医者の証言を告げてやろうかとおもった。

〈父は死にぎわに自分がやったんじゃないと言いました。父はだれかの身代りにさせられたのです。だれの身代りに立ったか、社長、あなたはご存知でしょう〉

といきなり切りだしたら、保科はどんな反応を示すか？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.